

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人を紹介致します



合田 直弘

この会報が皆様のお手元に届く頃、北米競馬の祭典ブリーダーズCの開催が目前に迫っているはずだ。11月5日と6日の両日、カリフォルニア州のデルマーを舞台に開催されるブリーダーズCの、2日目に組まれた牝馬限定G1ライリー&メアターフ(芝11F)に、有力馬として出走予定のウォーライクゴッデス(牝4)が、今月のこのコラムの主役だ。

このレースには、矢作芳人厩舎のG1・2勝馬ラヴズオシンリュー(牝5)も出走の構えを見せており(同日のG1BCターフに回る可能性もあり)、同馬の強力なラバルとなるウォーライクゴッデスの名を、既に耳にされている方もおられると思う。

ウォーライクゴッデスは、ケンタッキーの名門カルメットファームの生産馬だ。父イングリッシュチャネルもカルメットの供用種牡馬で、現役時代は7馬身差で圧勝した07年のG1BCターフを含めて芝のG1を6勝。エクリップス賞最優秀芝牡馬に選出されている。種牡馬としても、20年のエクリップス賞最優秀芝牡馬チャネルメーカーなど、芝での活躍馬を続々と送り出している。

母は1勝馬で、祖母は未出走馬。3代母口マネッテが重賞入着馬で、その産駒にG1「ローネーションC(芝12F6Y)3着馬」、「ラッシュヨーバー」や、G1「デューハーストS(芝7F)3着馬」、「ミナルカ」といった

欧洲での活躍馬がいるというファミリーを背景に持つ。牡系はトップクラスとは言い難いが、そぞろの血統基盤は持った馬と言えよう。

だが、マーケットにおける同馬に対する評価は、辛辣だった。

ウォーライクゴッデスは、生まれて7ヶ月後にキーンランド・ノヴエンバーセールに上場されたが、仕分けられたのはブック6というセールの最終盤で、買い手はいつたものの価格はわずか1200ドル(当時のレートで約14万円)という、父の種付け料(2万5千ドル)の20分の1以下という低評価だった。

同馬はさらに、翌年のキーンランド・セブンバーチ歳市場に上場されたが、ここでも同馬が仕分けられたのはブック6で、結果はなんと、リザーブ価格1000ドル(約11万円)でも買い手がつかず主取りになっていた。

3度目のセール登場となつたのが、19年6月のOBSジューン2歳セールで、公開調教で頑張つて1F=10秒4というまずまずの時計を出した同馬は、現在の馬主に3万ドル(当時のレートで約329万円)で購買された。

同馬を管理することになったのは、94年から96年まで16連勝を達成したシガーラを手掛け、既に殿堂入りを果たしているビル・モットだったが、同師はウォーラ

イクゴッデスを見ると、頭を抱えてしまつた。

それこそが、マーケットで購買者たちに馬が小さくて、華奢だったのだ。

敬遠された要因だった。

2歳セール出身馬ではあるが、このまま継続して調教を続けていくにはフィジカル面で無理があると見たモット師は、馬に成長する期間を与えるべきと判断。ウォーライクゴッデスのデビューは、3歳の9月までずれ込むことになった。これが奏功したのである。

20年9月にチャーチルダービーインズのメイドン(芝9F)でデビューウィンを飾ると、続く一般戦(芝11F)も快勝。4歳初戦となりたG3ザヴェリワンS(芝9.5F)で5着に敗れ連勝は止まつたが、次走のG3オーキッドS(芝11F)を制し重賞初制覇。さらに、G3ビーウィッチS(芝12F)、G2グレンスフォールスS(芝12F)、そして9月4日にサラタガで行われたG1フラワーボウルS(芝11F)とすべて白星で通過し、5連勝でブリーダーズCに向かうことになつたのである。

1歳時にわずか11万円でも買い手がつかなかつた馬が、有力馬としてブリーダーズCに挑むのだ。シンデレラ物語がどのよな結末を迎えるか。そういう意味でも、6日のBCフリリー&メアターフは見逃せない一戦である。